
お稲荷騒動

七草千夜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お稲荷騒動

【Z-コード】

Z0275BA

【作者名】

七草千夜子

【あらすじ】

黒い色をした狐と出会った華とは言えない女子高校生。神様を巡つて動き始める人と獣。鳥居の先には何がある?

チャイムが鳴つて皆帰る用意をし始めた。今日の授業が終わり、後は自分の家へ帰るだけだ。私の場合は、華の女子高生とはよく言ったもので、実際私には華などは一切感じられない。私の第一印象は誰に聞いたつて、おとなしそう。こんなことを言われ続けて私は裏表がある人間になってしまった。せめて外見が良ければよかつたのだが、生憎何処にでも居そうな普通の顔止まりである。

「月白さんバイバイ」

「あ、うんバイバイ」

学校の子達とは未だにここまでしか発展していない。

憧れていた高校生活もこんな調子で今の生活は何にも楽しくない。出来ることなら中学生に戻りたい。それに今の女子高校生にはいないうな古いものが好き、というのが趣味な私は勿論周りの子達の話はわからない。何か生活に刺激があればいいのだけれど。

先程のあいさつを交わした子と別れ、いつもと何ら変わらない帰り道の風景を眺めながら歩く。此処の土地は昔からある古い家が多くて、古いもの好きの私にはとても目の保養になつた。

私が一番好きな大きな古い家にさしかかった。何度見てもこの家はいいな、と立ち止まつて見ていると苦しそうな動物の鳴き声が聞こえた。その鳴き声を聞いて少し心が浮き上がつた。それだけでいつもとは違う帰り道だつたからだ。もう一度鳴き声が聞こえ、何かいると確信した私は声のする方へ近寄つてみた。確かに、この家と隣の家の隙間からだつた筈だ。暗くてよく分からぬが周りの色とは違う丸いものを見つけ其れに近寄つた。少し不審に思いながらその場で腰を少し下ろし、様子を見た。すると耳が見え、顔も見えた。それは黒い色をした狐だつた。私を視界に確認するとすぐに傍から離れ、威嚇してきた。狐の実物を見たのは人生で初めてだ。まして黒い狐などは居ないと勝手に思つていた。しかし、この狐を見る限り

それは違っていたようだ。その場所から動くことも出来ず固まっていると、何故かパツタリとその場で狐は倒れた。

「あつ」

驚いて声を上げてしまったが、幸い周りには誰も居なかつた。恐る恐る近づいて少し触つてみると、ピクリとも動かない。もしかして死んでしまつたのでは、と思ったが腹が動いていたので死んではない様だ。でもどうしよう、見たところ怪我はしていないけれど放つて置けば何れ死んでしまうだろう。

しばらくその場に立つて考えて結局家に持つて帰ろう、といつ決断に到つた。見つけたのも何かの縁かもしれないし、いつもと同じ毎日から抜け出せるような気がした。倒れている狐を着てているセーターで包み抱える。大きさは小型犬くらいの大きさで、決して小さくはなかつたが腕に抱えられる程度だつた。いつも通りの道を歩いていて気がついた。私は電車通学だつた。勿論この狐と一緒に電車は乗れない。しかし、最寄りの駅から三駅だ。このくらいならば歩けるだろう。初めて歩くが線路に沿つて歩いていれば大丈夫だらう。外も暗いから怪しまれない。仕方ない、歩いて帰ろう。

それから三時間歩いて歩いて、やつと家に着いた頃には八時になつていた。無事に家に帰れたことが何よりである。鞄から手早く家の鍵を出し鍵穴に居れ捻つた。ブレザーを着ているとはいえ、冬だから寒いのだ。

「ただいま

少し経つてからおかえりという母の返事が返つてきた。勢いで狐を持つて帰つてしまつたが母はなんて言つだらうか。少し控え気味で廊下を歩いてリビングに向かつた。台所にいる母を横目にリビング

にたどり着いた。本当にびっくりが。

「あんた遅かつたけど何してたの」

「ちょっと、ね」

怪訝な顔をした母の視線が私が抱えているセーターに移る。

「何で寒いのにセーター着てないの」

「え、ちょっと脱ぎたくなつて」

少しこたつ布団に隠して言い訳をしていると、運悪くセーターがそもそもと動いた。何で今動ぐの。

「それ何」

と半ば強制的にセーターを剥がれ包まれていた黒い毛が露になった。狐は目を薄く開いて周りを確認しているのか首を動かした。

「何で狐がいるのよ」

少し声を張り上げて、母が聞いてきた。そんなことはお構いなしに狐はどこか苦しそうな声を上げる。どうしよう。こつかはバレるものだけだ、それはそれで何かと大変だ。

「えっとね、拾つた。」

「はあ？」

目を泳がせながら母に伝えた。母は眉間に皺を寄せて狐を見る。狐と母は目を合わせ少しの間見詰め合つと私の方を向いて溜め息を吐いた。駄目だつてやっぱり言つのだろうか。

「あなたが面倒見るならいいわよ」

なんと、またかの承諾。明日は雪が降るなど言い掛けで口を閉じ、取り敢えず深く頷いた。こんな事言つたら前言撤回とか言われそうだ。良かった。こんな寒い中にいたら死んでしまっていたかもしない。それに、黒い狐なんて滅多に居ないと思つて、何処か怪しい所に連れて行かれてたかも。少し強く抱きしめると狐が一言声を上げた。

まず体を綺麗にして、飯をあげて、それからこの子のことを考えよう。こたつから立ち上がり、風呂場へ足を向けてた。

お風呂から上がった狐の毛、特に尻尾はとても感触がよくて柔らかかった。警戒心はいつの間にか無くなつたみたいで、自分から近づこうとはしないが威嚇などはしてこなかつた。

そういう「飯だけど、狐だから油揚げとかが良いのだろうか。

「お母さん、油揚げある?」

「あるけど」

冷蔵庫から母が油揚げを出して私にそのまま渡してきた。手に取つた油揚げは冷たい。こんな冷たいままじやさすがに狐も食べないだろう。ジッと母の眼を見るとすぐに逸らされた。

自分でやれつて事か。

フライパンの上に油揚げを一枚置いて少し温まる程度焼いた。これならこの狐も食べられるだろう。リビングのカーペットに立つていた狐の前に、焼いたそれを置いてみる。すると鼻を油揚げに近づけクンクンと匂いを嗅いで少し口に含んだ。それだけの行為だが、とても癒される。

油揚げが気に入ったのか口を動かしてもの凄い勢いで食べ始めた。

「名前どうしようかな」

そう呟くと狐の耳が少し反応した。やっぱり自分の事だから気になるのだろうか。狐はこちらに目を向けて私と目を合わせた。よく見ると、瞳は黒いだけではなく紫色も少し入っているように見えた。綺麗な瞳だ。少しの間見つめ合つていると、肩を叩かれた。

後ろを振り返ると母が立つていて

「おじいちゃんの神社に今から行きましょう」

と言に出した。

おじいちゃんの神社って何処だ。そもそもそんな話初耳だ、聞いたことが無い。それに今からそんな所に行ける訳が無い。もう十時を回っているのだ。

「おじいちゃんの神社って何よ」

「月城神社よ」

月城神社は私の家から歩いて十分の所にある神社だ。どうこういとだ。おじいちゃんに会つたことがないから分からないが、本当にそうなら親戚の集まりとかで少しくらい聞いたりするだらう。訳が分からぬといつた顔で母を見るが、怖いほどに母は無表情で私を見ていた。

「早く」

私の腕を掴んで立たせ玄関へと引っ張られる。私は酷く困惑していた。まず第一にどういうことかよく分からぬし、母のこんな怖い顔は見たことが無かつたのだ。

「ちょっとー」

声をかけて腕の手を引き剥がそつとするがびくともしない。母はこんなに力は強くなかったはずだ。玄関の扉を開けて私を引っ張り外に出る。そこまで来るとさすがに怖くなつて私は泣きやうになつていた。

その時だった。あの黒い狐が、腕を掴んでいた母の手を噛んだの

だ。その痛みに母は顔を歪め私から手を離した。今だ、と思い私は母から離れた。狐が私の服の裾を引っ張った。走り出しそうな勢いでこちらを向いていた。ついて来いということだろうか。

後ろを振り返り母を見る。母の目は黒色に染まっていて、腕をだらんと下にさげて首は傾きこちらを無表情で見ていた。迷っている暇などなかつた。

狐が走り出し、私は必死になつてその後を追いかける。もう狐しか目に入らず、木の枝が頬を切るがそんなものには構つていられなかつた。捕まれば終わりなのだと感じた。

少し先に鳥居が見える。

あれは、月城神社だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0275ba/>

お稲荷騒動

2012年1月1日21時47分発行